

# 祝世紀を超えて贈る 祝祭のシンフォニー



今回演奏させていただくチャイコフスキーのピアノコンチェルト第1番は、私にとってたくさんの思い出のつまった一曲です。初めて弾いた時のこと、チャイコフスキー国際コンクールの時のこと、初めてサントリーホールで弾いた時のこと、ロンドンで弾いた時のこと...どれも胃がよじれるほど緊張しましたが、今となっては良い思い出です。

たくさんの指揮者からさまざまなことを教えていただき、私のチャイコフスキーの第1番は私と共に成長してきたと言っても過言ではありません。今回のコンサートも、また私のチャイコフスキーの第1番に新たな魅力を付け加えてくれることを願っています。そして、最高の音響とロケーションを誇るびわ湖ホールで皆様とチャイコフスキーの音楽を通して素晴らしい時間を共有できることを楽しみにしています。

ピアニスト  
上原彩子



撮影:福岡弘文



## 指揮者 篠崎靖男

ショスタコヴィチの交響曲第5番は、十大交響曲に数えられる人気のある名曲です。実はショスタコヴィチは20世紀の作曲家として、我々とほぼ同時代を生きているため、彼の音を自然に聴いて、自然に感じる事ができます。ただ大きな違いは、彼は人生の大部分を、言葉や表現を自由に発することができない制限された社会で過ごしたことです。この時代、言葉を持たない音楽には、むしろ強い意志が込められていたに違いありません。また、チャイコフスキー国際コンクールの覇者、上原彩子さんと共演するチャイコフスキーのピアノ協奏曲は、言わずと知れた名曲中の名曲です。チャイコフスキーは、帝政ロシア時代、まさに芸術の花が咲き誇る時代を生きました。時代は違っても、ふたりの作曲家の大きな情熱の源は祖国ロシア。両作品ともにクライマックスはロシアそのものです。

最後になりますが、今年3月にはしがぎん経済文化センター様が創立30周年を迎えられるとのこと。永年の郷土滋賀に対する文化貢献に感謝申し上げるとともに、心からお喜びを申し上げます。



## ロシア音楽のダイナミズムを みんなに体感してほしい

2013年5月篠崎靖男プロデュースオーケストラシリーズvol.3マラー「復活」公演より

しがぎん経済文化センター創立30周年記念イヤーのオープニングを飾るのは、4回目を迎える篠崎靖男プロデュース・オーケストラシリーズ。マラーの「巨人」、ベルリオズの「幻想」、マラーの「復活」に続いて、新しいパートナーである日本センチュリー交響楽団とショスタコヴィチの「革命」をお届けする。

今回は、ロシアの音楽史に燦然と輝く2人の巨人、19世紀のロシアを代表する作曲家チャイコフスキーと、20世紀のソビエト時代を象徴する作曲家ショスタコヴィチをクロースアップ。帝政ロシア時代から、2世紀初頭のロシア革命を経て、社会主義の時代に至る、激動の世紀を滔々<sup>たちち</sup>と流れるロシア音楽の雄大な大河にふれる。

チャイコフスキーは、今回の30周年という祝祭的な雰囲気にとりつらりの祝典序曲「1812年」と、彼の最もポピュラーなピアノ協奏曲第1番。祝典序曲「1812年」は合唱付きで、マラーの「復活」に続いてKEIBUN第九合唱団がこの楽曲に挑戦する。超絶技巧の演奏が求められるピアノ協奏曲第1番は、2002年チャイコフスキー国際コンクールピアノ部門で日本人として、また女性として世界で初めて第1位を受賞した上原彩子がソリストを務める。まさに聴きどころ満載だ。

そしてショスタコヴィチの交響曲第5番。スターリンの「大粛清」という過酷な社会状況の中から生まれたこの超有名な名曲は、オーケストラの魅力がいっぱい。重苦しくも力強いエネルギーを内包する第1楽章から、一転して第2楽章は躍動感のある軽妙なスケルツォ、そしてむせび泣くような弦楽器の悲痛な響きが印象的な第3楽章、それを打ち破る第4楽章の爆発するような高揚感...その圧倒的なオーケストレーションは感動的だ。

19世紀から20世紀、そして私たちが今いる21世紀へ—世紀を超えて贈るロシア音楽のダイナミズムを、多くのおみなさんに体感してほしい。

## 名曲にドラマあり！ここが聴きどころ



### ナポレオンに勝利！合唱と祝砲がひびく！！ チャイコフスキーの祝典序曲「1812年」

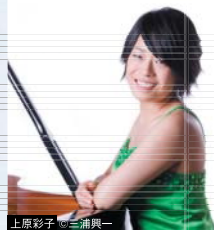
表題の「1812年」は、ナポレオンのロシア遠征が行われた年で、フランス帝国のロシア侵攻と敗北、ロシア帝国の勝利を祝福する情景がドラマチックに描かれている。冒頭ではロシア正教の聖歌で信仰の篤いロシア国民を表現し、のちにフランスの国歌となる「ラ・マルセイエーズ」の旋律で侵略者フランスを描いている。これにロシア帝国国歌がかぶさることで戦

闘を描写。ナポレオンの敗退とともに再び聖歌が流れ、クライマックスに鐘が鳴り、祝砲が轟く。演奏会のスタイルによっては、本物の大砲が使われることもあるから実に壮大だ。原曲のロシア正教の聖歌は合唱ではないが、今回の公演では30周年を祝ってKEIBUN第九合唱団による合唱付きバージョンでお届けする。まさに30周年記念事業のオープニングにふさわしいプログラムである。

### “演奏不可能”の酷評から超有名曲になった チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番

序奏部の勇壮な管弦楽と甘美なピアノ演奏は、誰もが一度は耳にしたことがあるだろう。この超有名曲も作曲当時は評価が分かれていた。チャイコフスキー最初のピアノ協奏曲は、友人のニコライ・ルビンシテインに献呈するはずだったが、この曲を聴いた彼に「無価値」「演奏不可能」と酷評され、ドイツ人ピアニストのハンス・フォン・ビューローに初演を依頼した経緯がある。この曲が世界的にブレイクしたきっかけは、冷戦下のソ連で開催された第

1回チャイコフスキー国際コンクールで、アメリカ人のヴァン・クライバーンが優勝したことだ。この快挙により、彼のレコードがビルボード誌のポップ・アルバム部門1位に輝いた。時を経て、同コンクール・ピアノ部門で第1位を受賞した上原彩子が、今回の公演でこの名曲を奏でる。「演奏不可能」とまで言われたピアノの極致を堪能してほしい。



上原彩子 三浦興一

### 体制との緊張関係が伝わる「革命」とは… ショスタコーヴィチの交響曲第5番

ショスタコーヴィチの交響曲第5番は「革命」と呼ばれている。しかし、これは作曲家が意図したものではない。1937年のロシア革命20周年に初演された事実と、社会主義時代を代表する作曲家という強いイメージに拠るものだろうか。ショスタコーヴィチは第一次ロシア革命の翌年に生まれ、まさに社会主義革命の洗礼を受けた時代の寵児という印

象が強い。だが、芸術表現に対して当局の検閲が厳しく、ショスタコーヴィチもソ連共産党機関紙「プラウダ」で作品が批判され“反体制”のレッテルを貼られる。それまでの前衛的な音楽表現を封印し、苦渋のすえに古典的な形式の交響曲第5番を発表する。社会主義リアリズムを見事に表現したことで名誉回復となるが、果たして体制への迎合だったのか、外見上そう見せたのか、真意は不明だが、誕生した楽曲はすばらしく、彼の代表曲となった。



しがぎん経済文化センター創立30周年記念事業 第1弾  
篠崎靖男プロデュース オーケストラ・シリーズvol.4

### ショスタコーヴィチの「革命」

- 4月13日(日) 15:00開演 びわ湖ホール大ホール
- KEIBUN友の会会員料金：プレミアムシート6,500円<sup>(※)</sup>、S席5,500円、A席4,500円、B席3,500円、C席3,000円
- ※プレミアムシート特典 ①公演当日リハーサル見学 ②終演後出演者との交流会への参加
- 指揮：篠崎靖男 管弦楽：日本センチュリー交響楽団 ピアノ独奏：上原彩子 合唱：KEIBUN第九合唱団
- 曲目／チャイコフスキー「祝典序曲「1812年」(合唱付)、ピアノ協奏曲第1番、ショスタコーヴィチ「交響曲第5番」



日本センチュリー交響楽団